

として社会福祉のために民生委員、児童委員を五期務めさせていただき、現在は武佐学区社会福祉協議会の会長として勤めており、最近高齢者社会と地域社会を目指し、福祉活動にと貢献させていただいております。

追 想

滋賀県 向 井 辰 雄

近江八幡市大字古川字益田で大正五年二月一日に生まれる。桐原尋常高等小学校卒業。青年学校に学び、徴兵検査を受け甲種合格、近衛歩兵第三連隊に入隊。家業は農業。召集時の家族は父、母、妻、長女。

現役除隊後、一回目の召集は福知山二十連隊。二回目の召集は敦賀十九連隊、ここで独立歩兵大隊編制、千鳥列島に派遣さる。

終戦後一週間ごろ、ソ連軍上陸、武装解除さる。

八月十六日ごろ、各隊集合命令により大隊長より終戦の旨伝達さる。その時の命令により編成はそのまま、

各人の行動は軽挙妄動を戒むようにとあるが自爆する部隊、逃亡する者などあり。混乱の状況であった。

八月末ごろ、ソ連貨物船が入港し、全員内地に送還するとのことで部隊全員乗船、内地の方向に向かって出港。と喜びも束の間、夜間いつの間にか北に向かって航行、そのままシベリアに連行される。着いた所は港らしくもなく荒れ放題の所であった。そこから貨車に乗せられ、イルクーツクの第十一分所で元凶人のいた荒れ放題のひどい所で、南京虫やシラミがたくさんおり、眠れず大変だった。

収容人員は千人ぐらいで、給与も悪く、再三所持品の検査で持ち物はほとんど取られてしまい、着ている物だけになってしまった。

作業はほとんど鉄道建設で、昼夜の別なく交代でさせられ、厳寒時でも焚き火は禁じられ、零下三〇度以内なら必ず作業に出された。土が凍り作業ノルマが上からずヴィストラとせきたてられ、栄養失調者がたくさん出て、交互に病院などへ送られて行った。その後、収容所の入替えなどがあり、製材所や建物建築など

に従事させられた。

勞役については、零下三〇度以上あれば休みのはずなのに十分実行されなかった。また、熱が出て軍医の許可がなければ必ず就労させられた。葉などもなく、ただ寝ているだけであった。着衣は、入ソ当時の軍衣そのままで嚴寒時は非常に困った。

自分の家は先祖代々から宗旨の天台宗は勿論、特に大峰山にお祭りしてある役行者神變大菩薩を信心し、父子共々再三お参りし、家内安全を祈願しておりましたので、これも私の修行と思い、必ず帰してくださいと信じておりました。

コムソモリスクにおいてバサーチースト（鉄市場）にて作業中、急に帰還のため收容所に帰るようナチャリニック（監督官）に言われ收容所で所長より帰還命令を受けました。それから約十五日間貨車にてナホトカに着きました。それから三日間ほど帰還業務するうち、榮豊丸が入港しましたので乗船しました。ナホトカでも赤旗の歌を歌い最後まで赤化教育を受けました。そして昭和二十三年八月二十一日舞鶴に上陸すること

ができました。

実家に帰って見れば田畑は荒れ放題、終戦までは出征兵士の留守家族として銃後のいろいろの奉仕作業で何とか作付けしていたが、その後の供出割当も強制的で食う物もありませんでした。早速に村役場に交渉に行き、当座の食糧の配給を受けなければならぬような状態でした。それに父と妻は病気で仕事もできないような状態で一時は途方にくれましたが、あの困難の中、帰還できたのだから何とかせねばならないと思い、何くそと思い一生懸命働きました。しかし、シベリア帰りで赤化思想が邪魔をして雇ってくれる職場がありませんでした。これでは農に生きる方法しかないと考え、農業に力を入れました。そのうち二、三年して父も妻も亡くなり、生きる望みも失いかけてましたが、再婚して家計の再興に努力いたしまして、ようやく今日の安泰なる生活ができるようになりました。